

ブラジルでの2023年1月8日の連邦議会等襲撃事件

AALAニュース用書き下ろし記事

山崎圭一 横浜国立大学大学院国際社会科学研究院・教授

日本 AALA 連帯委員会常任理事

脱稿日：2023 年 1 月 31 日

1 はじめに：三権広場の襲撃

ブラジルでは、2023年1月1日から、新しくルラ氏（労働者党）が連邦大統領に就任して、新しい左派ないし中道左派の政権が始まったのであるが、直後の1月8日（日曜日）に、前代未聞の事件が首都ブラジリアで発生した。すなわちボルソナロ前大統領の支持者ら約5千人が三権の建物を襲撃したのである。国会（上院、下院）、大統領府および最高裁判所である。ちなみに、執務機能と寝室など公邸を兼ねる米国のホワイトハウスと異なり、ブラジルの大統領府は執務機能が中心で、大統領公邸は少し離れた場所にある。さて、各建物は、「三権広場（Praça dos Três Poderes）」にある。この広場は、観光客も自由にはいれるオープン・スペースである（最後の写真付きの補足を参照）。

今回の事件は、2021年の1月6日に、米国で生じたトランプ前大統領の支持者らによる連邦議会の襲撃を想起させる事件であったが、米国で襲撃されたのは連邦議会だけであった。今回ブラジルでは三権すべてが襲われたのである。抗議をしにきた人々が、ブラジルのシンボル・カラーである黄と緑の服装（サッカーのブラジル代表のシャツ）や黄と緑などの色から成るブラジル国旗をまとして行進していたところ、途中から暴徒化し、三権の建物内に侵入して、室内を荒らした。治安部隊が出動して、最終的には鎮圧された。暴徒は、8日に約300人、翌日約1100人、あわせて約1400人が拘束された。

2 当日の動き

Jornal o Globo の YouTube チャンネルの動画によって（注1）時間をおってみていくと、最初、ブラジル各州から100台以上のバスにのって、ボルソナロ前大統領の支持者がブラジリアに集合した。集合場所は、三権広場から約8キロ離れた陸軍司令部の前であった。そこから三権広場めざして、抗議の行進を始めた。横10人ぐらいの幅広い隊列が形成された。軍事警察がパトカーや警官を出動させて、行進をエスコートしていた。行進自体はのどかな雰囲気に見える。14時50分に、先頭部分が警察の最後のバリケードを破って、連邦議会に流れ込み始め、次々に行進の参加者が侵入し、屋内だ

1 動画のタイトルは、Terror em Brasília（ブラジリアのテロ）。出所の URL は以下：

<https://youtu.be/AYRo5TxjmqE> （最終閲覧日：2023 年 1 月 21 日）

けでなく、議会ビルの屋上も埋め尽くした。15時10分に大統領府を、15時40分に最高裁判所を襲った。彼らは室内を荒らしたが、たとえば大統領府内のアート作品を破壊した。警察が催涙弾や騎馬隊などで制圧しはじめたのは18時20分、ほぼ沈静したのが19時00分であった。ルラ大統領がサンパウロ州から戻って現場に到着したのは、22時00分であった。O Globoのオンライン記事によれば、拘束された人々は1406人で、そのうち1月20日時点で、464人が釈放され、942人が拘束中である（注2）。

この暴力行為に対して、翌日9日に、おおくの市民が街路にでて非難する行動をとった。サンパウロ市内では、目抜き通りであるパウリスタ通りの、MASPという美術館の前のあたりだけで、6万人が参集したようである（注3）。こうした中、ブラジルの労働組合組織のナショナル・センターであるCTB（注4）の事務局長であるロナウド・レイチ（Ronaldo Leite）氏は、「クーデター計画は選挙で敗れている。力やクーデターで彼らが勝利することはできない。民主主義の計画に投票した人は、こうしたクーデターを計画した人にたいする処罰を要求すべきだ」と論じた（注3と同じ）。全国各都市の抗議運動が共通して掲げた標語は、「Sem anistia e sem perdão / Queremos Bolsonaro na prisão」で、和訳すると「アムネ스티（恩赦）や減刑なく、ボルソナロは刑務所に入って欲しい」である。

3 事件をどうみるか：3つのポイント

今回の事件から言えることは、第1に、クーデターなど実現しなかった、という点である。この点について留意すべきは、ブラジル社会が左派的だから、ということではなく、実際は反対に右派ないし中道的だという事実である。昨年の総選挙では、連邦議会（下院、上院）も州議会も、中道と右派が伸びて、左派は後退した。州知事選の結果は多様だが、左派が取れたのは、26州プラス首都ブラジリア市の27の知事ポストのうち、貧困な東北部の4州の知事に過ぎない。左派が勝利したのは、実は大統領選だけで、それも実はサンパウロ州とリオ・グランデ・ド・スル州では、ボルソナロ候補の得票数

2 “Moraes encerra análise e mantém 942 presos preventivamente por atos golpistas”より。

<https://oglobo.globo.com/politica/noticia/2023/01/moraes-encerra-analise-e-mantem-942-presos-preventivamente-por-atos-golpistas.ghtml> （最終閲覧日：2023年1月21日）

3 情報源は、PCdoB（ブラジルの共産党）の公式ウェブサイト。

<https://pcdob.org.br/noticias/manifestacoes-reforcam-defesa-da-democracia-e-isolam-bolsonarismo/> （最終閲覧日：2023年1月20日）

4 正式名は、Central dos Trabalhadores e Trabalhadoras do Brasil である。留意すべきは、労働者にあたるポルトガル語について、従来は男性名詞で両性を代表していたが、このフルネームは、男性名詞と女性名詞を両方併記している点である。労働運動におけるジェンダー平等意識の進展を反映していると思われる。

がルラ候補を凌駕していた。ブラジルの選挙結果の傾向は、3年前(2020年)の基礎自治体の統一地方選から右傾化しており、今回暴徒を取り締まった治安部隊の隊員も、大多数はボルソナロ氏や右派、中道の政党に投票したはずである。にもかかわらず、今回のテロをゆるさず、いわばルラ政権を守ったのである。軍をふくめてブラジル社会全体が、テロを許さない民主主義の精神を発揮したといえる。

第2に、今回の事件で、「選挙は不正で、勝利したのはボルソナロ候補だった」という情報は、間違った陰謀論に基づいており、フェイク・ニュースであることを、ブラジル人がいっそう確信したと思われる。それだけブラジル人の情報リテラシーがさらに向上したといえよう。そもそも選挙が不正なら、大統領選だけでなく、右派、中道が勝利した連邦議会、州議会、州知事の各選挙結果も間違いだということになり、ボルソナロ氏は、大統領選以外での自らの勢力の勝利を「自己否定」することになる。最初から無理筋の、身勝手な主張であった。今回の事件に、どの程度ボルソナロ氏がかかわっていたのか、現時点ではわからないが、いずれにせよ、これで彼の政治生命はかなり短縮したように思われる。筆者は、総選挙では、大統領選以外は伸びたのだから、ボルソナロ氏の政治生命はまだ十分にあるとみていた。だから、将来の可能性を考えて、彼は違法行為には走らないだろうと考えていた。しかし、関与の度合いはどうあれ、これで彼の政治生命は断たれたか、相当短縮したのではないだろうか。

第3に、今回の事件に限らないが、最近よく社会が「分断されている」という表現を、ポルトガル語の記事でも英語でも日本語でも、みかける。「分極化」という言葉もある。いずれも流行語のように思われるが、適切な表現かどうか、慎重に扱うべきだと筆者は考えている。もともと近現代の市民社会は、筆者の見方では階級社会であり、分断されている。労働者階級と資本家階級という分かれ方を基本として、中間層をふくめて多層的で複雑であるが、とにかく近代市民社会は格差社会である。封建時代の身分制をやめて「自由、平等、博愛」の社会に改造したはずなのに、平等はイリュージョン(幻想)である。グローバル化と新自由主義の時代に、ますます格差は広がった。＜今までは統合されていたのに、最近分断されている＞という印象をあたえる解説をみかけるが、もともと分断されている。

4 「分断」「分極化」とはなにか

使う人によって「分断」や「分極」の意味が異なっていて、要注意の流行語である。たとえば、東南アジア諸国の国内政治に詳しい川中豪教授は、近著『競争と秩序』(白水社、2022年)の第6章「パーソナリティと分極化の政治」で、フィリピン、マレーシア、インドネシアなどに「分極化の政治」を適用している。川中教授は、「分極化」に、2つの現象に対応する2つの意味を与えているが、1つは政治家の選挙戦略のことである。大統領候補がある 이슈ウで国民を分断するような煽(あお)りをおこなって、

対抗馬に勝って権力を手にいれるという手法を指している。思い出せば、日本にもそれはあって、小泉純一郎首相が2005年、郵政民営化という単一イシューでいわば国民を「分極化」して（自民党内すら「分極化した」）総選挙をした。8月8日に衆院を解散して（郵政解散）9月11日の投票の結果、自民党と公明党の与党が圧勝した。「小泉劇場」といわれ、たしかにこのイシューでは国民は「分極化」したが、これは選挙の手法を指しているのである。ポピュリズムは、ほとんどが悪いポピュリズム（ナチズムなどの全体主義、独裁政治）で、良いポピュリズムも少しはあると私はおもうが（この議論は深入りすると大変なので、立ち入らない）「分極化」は悪いポピュリズムの手法である。

これをブラジルに適用すると、要するにルラ候補は「分極化」という煽りの手法をつかって、選挙に勝ったのか？ということが論点になる。さらにいえば、ルラは悪い意味でのポピュリズムの政治家か？である。右派はそうようにレッテルを貼りたいのだと思う。演説だけをきけば、トップの政治家は饒舌なので、煽りにも聞こえるから、区別は簡単ではないが、以下のように区別したい。

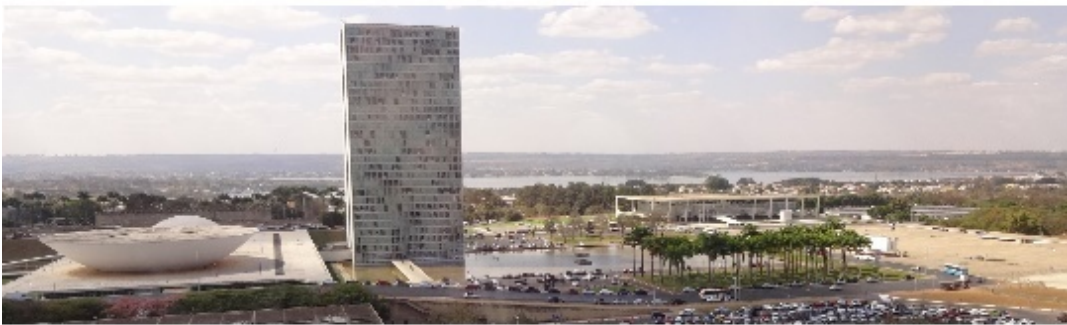
悪い煽り(分極化の選挙手法、「劇場型政治」)	選挙に勝つための手法として、重要でない論点やほとんど存在しない格差を誇張して、有権者を「相手候補がよいか私がよいか」に分断して、「相手は最悪だ。私が良いに決まっている」と煽って、票を獲得すること
正当な饒舌さ	選挙に勝つためではなく、現実に厳然として存在する格差をとりあげ、その是正策をうったえて、票を獲得すること

右派や富裕層は、現実に歴然と存在する格差の現実をおそらく十分に知らないので、ルラの演説が「悪い煽り」「分極化の政治」に聞こえるのかもしれない。筆者の理解では、ルラは「正当な饒舌さ」のケースであって（ポルトガル語の言語学の観点から本当に饒舌かどうかを判断する専門的能力は筆者にはないが）その演説は煽りではなく、したがって彼の政治は「分極化の政治」ではない。

私は、＜連邦と地方の議会は中道と右派、大統領は左派＞という組み合わせについて、社会的合意があり、この点ではブラジル人はまとまっていると感じている。資本家と労働者の階級的な分断は深刻だが、ルラの言説で分断されてはいない。つまり有権者は煽りには乗っておらず、政治リテラシーは低くないであろうと考えている。逆に、有権者の政治リテラシーが低くなると、愚かで間抜けな政治家を選んでしまう。愚かな政治家は、景気回復や貧困撲滅に失敗するだけではない。彼・彼女は、仮想敵国の存在しない脅威を脅威と幻想して軍拡を煽り、国民を戦争へと導くのである。

補足 ブラジリアの「三権広場」

4つの写真を上から順に見ていただくと、だいたいの位置関係が把握できると思われる。上3つは、2015年に筆者が撮影したもので、同じ地点で左から右へと撮影している。1枚目の右端(=2枚目の左端)が連邦議会で、お椀をうつ伏せにしたような形の建物(奥)が上院、上にむけて置いたような形の建物(手前)が下院である。隣りの高層ビルは議会事務局である。その右奥が大統領府、手前の広場が「三権広場」、3枚目の写真に写っている、三権広場の手前の建物が連邦裁判所である。4枚目の写真は、2017年に筆者が三権広場から撮った連邦裁判所で、見た目は小さいが、側に別棟がある。



出所：撮影は4枚とも筆者による。